

peer support net
Shibuya

子ども・若者を
ひとりにしない
つながりが生まれる
地域づくり

NPO法人 ピアサポートネットしぶや



独立行政法人福祉医療機構
社会福祉振興助成事業

この冊子は、独立行政法人福祉医療機構 令和5年度（補正予算）
社会福祉振興助成事業の支援を受け実施しています



はじめに

小中学校での不登校、若者世代の自殺が過去に最も多いと報道されています。年ごとに重なるこの数字を前にして、私たち大人は、子ども・若者、とりわけ10代20代の若者のことをどれだけ知っているだろうか？ そのための「育つ機能としての居場所とは？」という難解な問いから始まった1年間でした。

昨年度のWAM助成では「子どもに寄り添い、親を支える」をテーマに、活動スタイルの異なる4団体のユニットが、地元の「学校の先生」を軸に勉強会という情報共有プラットフォームで、PTA、民生委員、青少年委員など各種の既存の団体とつながりました。学校を核とした地域共生インクルーシブ運動会のイベントでは、生徒会を中心として企画運営され、企業、行政、地区体育会などに拡大、限定された地域ながら、地域が面としてつながる予感を感じさせるものでした。

今年度は、こども食堂・冒険遊び場・校内カフェ・不登校、ひきこもり支援のユニット4団体の特性を生かし、「ひとりにしない」を共有しながら、地域の多様なセクターとつながりながら、10代20代の若者にとっての居場所機能について、若者世代と共に考え実践してみました。

第1部は、4団体ユニットがそれぞれ「ひとりにしない」を共有しながら子ども・若者とかわる場をつくった活動の記録です。

○ 昨年度の勉強会では、学校の先生から、子どもの育ちを支えるのは、学校だけでは難しいとの指摘がありました。高校生からは居場所は場所ではなく、他者との関係性がベースになっているとの意見が出されたこともあり、今年度は、子ども・若者を「知る」ことにフォーカスし、4回の勉強会を実施しました。昨年度から通算7回になります。

各回の記録、コラムに詳細が記録されています。課題としてきた「育つ機能としての居場所」では、大人が「聞く=聴く」ことをベースにした「本音に近づこうという試み」によって、「若者主体の居場所になる」としてまとめています。



○ こども食堂、校内居場所、冒険遊び場それぞれ切り口の違う居場所、多様な居場所が身近な地域にあること、高校生、大学生ボランティアの育ちも期待できるものになっています。

○ 学校とのつながりから始まり、街、企業、行政の共創を生み出したインクルーシブ運動会、学校が「未来」としての役割を担うことへの期待が高まりました。

第2部は、ピアサポートネットしぶやが4団体ユニットと協創し、不登校・ひきこもりの早期発見のために取り組んだ中学校でのカフェや居場所、合わせてピアサポーター（仲間）によるアウトリーチの記録です。

○ 不登校・ひきこもりの状態は、いつでも、だれにでも起こり得ます。早期に、親でも先生でもないピアサポーターによる「ひとりにしない」アウトリーチ、親や、家族のつらさへの共感が生まれる家族会が功を奏しています。

○ 中学校でのカフェや居場所、話し相手や学習支援をする大学生や企業のボランティアが増えてきました。ピアサポーターとして、この世代の揺れ動く気持ちに寄り添うことの難しさはあるものの、信頼の関係はおおきな財産です。

身近な地域で、できることをできる範囲で実施した居場所活動と勉強会では、私たち大人に「若者に近づく」という試みの大事さを突き付けています。このプロセスが、「育つ機能としての居場所」が生まれる第一歩かもしれません。

特定非営利活動法人 ピアサポートネットしぶや
理事長 相川良子



もくじ

はじめに	1
1.子ども・若者とかがわる場をつくる	4
子ども・若者の「いま」を考える みんなのサポらぶ勉強会	5
みんなのサポらぶ勉強会 2024年度参加者の声	7
こども食堂は地域の居場所	9
公立中学校での校内居場所の広がり	11
自由な遊びは成長の根っこ	
～せせらぎファンインの居場所づくり	13
学校と街・企業・行政が共創したインクルーシブ運動会	
原リンピック	15
Column とりこぼしのない支援のかたち	
ユニバーサル・アプローチ	17
2.不登校・ひきこもりの早期発見とアウトリーチ	20
事例1 長いひきこもり、それは不登校からはじまった	21
事例2 自律に向き合うアウトリーチ	23
事例3 親の会で見つけた自然体の自分	25
事例4 公立中学校の校内居場所を支える	
大学生ピアサポーター	
～「先生」以外の大人と出会える場	27
3.課題を探る	29
おわりに	31

1. 子ども・若者と かがわる場をつくる

こども食堂、冒険遊び場、校内放課後居場所、ひきこもり支援を運営する4団体が集い、すべての子どもが主役になれる社会・居場所づくりについて考える「みんなのサポらぶ」創設から2年になりました。勉強会での学びや気づき、発見を通して、いま求められている居場所について考えていきます





子ども・若者の「いま」を考える みんなのサポらぶ勉強会

みんなのサポらぶ/みんなの世界テーブル 加藤美由紀

子ども・若者が「主体」となる居場所づくりへ
子ども・若者のことを、子ども・若者に聞く を目指して

居場所にかかわりながら、子ども・若者の困難が増していく状況の中、子ども・若者の「今」がみえない、を出発点に昨年度より始まったみんなのサポらぶ勉強会。

昨年度は教育現場の先生にお話を伺い、当事者である高校生の声を聴き、学校だけで子どもの育ちを支えることは難しいこと、高校生のための居場所がないこと、若者たちにとって居場所とは場所ではなく、人との関係性がベースになっていることなど、居場所の必要性やあり方について、多くの示唆に富む視点を発見する貴重な機会となりました。

そして今年度。引き続き様々な角度から居場所に光をあて、都度新たなつながりを広げながら、居場所の「主体」としての子ども・若者の姿によりフォーカスしていこうという勉強会が開催されました。

第4回は「子どもの人権を考える」。保健室でのやりとりから、「それってわがまま？子どもの人権？」という身近な切り口を通じ、権利の主体として子どもをとらえ直してみえてくるもの話し合い、子どもが聞いてもらいたいときに受け止める人を増やしていくことが必要という居場所の機能について考えることができました。

第5回の「楽しくなければ学校じゃない！」では、コロナ禍による体験とつながりの喪失を、子どもたちが主体的にかかわる活動の工夫により回復しようとする中学校の取り組みが紹介されました。一方で学校の課題として、子どもや保護者、教員が抱える不安感の大きさ、コミュニケーションの変化による関係性構築の難しさが提示され、子ども・若者が安心安全であると感じる関係性を作っていくことの必要性を痛感しました。

第6回では、「ユニバーサル・アプローチ」について、近所のおじさん、おばさんの役割から考えました。地域のつながりが希薄になり、子どもの育ちに必要な多様な人とのかわりが不足しているという現状、困難を有する子ども・若者を対象としたターゲット・アプローチだけでなく、全ての青少年の自己形成空間を担保するような動きを身近な地域で起こしていく必要性、そして関係性を築くためにまず「聞ける存在になること」という私たちの役割を参加者で共有することができました。

第7回は、前回の課題を受けて「若者のことを若者に聞く」勉強会。4人の大学生が前回講師の梶野先生との対話を通じて、自らの経験や若者の生きづらさについて本音を話してくれました。後半では、参加者と大学生が小グループにわかれて膝をつき合わせて対話をし、とても暖かい雰囲気となりました。大きな発見は、若者一人ひとりの本音は聞いてみないとわからない、ということ。また「救われた」「とても楽しい会だった」という大学生の感想から、自分のことを話し、聞いてもらう経験が居場所をつくっていく可能性も感じました。

4回の勉強会を通して、子ども・若者のことを子ども・若者に「聞く」ことの大切さ、裏返せば、居場所にかかわりながら「聞く」ことができていない現状の課題を認識することができました。しかし子ども・若者の本当の姿、本音に近づこうという試みによって、ようやく個々に異なる「若者」という存在が居場所の主体として立ち上がり、居場所は「若者」がつくって初めて「居場所」になるという理解が進んだように思います。

そして近所のおじさん、おばさんの役割も明確になってきました。「居場所」を「若者」がつくる。それに力を貸し、支えていく。そのために勉強したり、発信したり、資金や場所を確保したり、行政や関係者に必要性を説いていったり。

まちには居場所があふれています。その居場所を「居場所」にしていくために、すべての子ども・若者が自分らしく楽しく生きていく社会にするために、若者が主体的に生きていくを応援するために。学び、考え、そして若者の声を「聞く」勉強会を続けていきたいと思います。

みんなのサポらぶ 勉強会 2024年度

参加者の声



今年度は、4回の勉強会を開催しました。会を追うごとに自由闊達な意見が飛び交うようになりました。地域・居場所のありようについて地域といっしょに考え続けていきます



第4回勉強会 それってわがママ？ こどもの人権？ ～保健室でのやりとりから考える

- 日程：2024年7月25日
- 会場：結・しぶや
- 参加者数：26名
- ゲスト：渋谷区立代々木中学校養護教諭山本貴子氏

- ・ 答えがないのが答えなのだろう。モヤモヤしていて、いい **子ども支援**
- ・ 自分の子どもの人権をあらためて考えさせられた **子ども支援**
- ・ 自分自身への問いかけができて有意義だった **行政**
- ・ 「頼ること」が当たり前の世の中になるといいな **子ども支援**



第6回勉強会 ユニバーサル・アプローチって何ですか？ ～近所のおじさん、おばさんの役割を考える

- 日程：2024年12月20日
- 会場：SCC千駄ヶ谷コミュニティセンター
- 参加者数：36名
- ゲスト：日本大学文理学部教授梶野光信氏

- ・ とりこぼしてしまった子どもたちをキャッチするユニバーサル・アプローチの考え方に共感した **民生委員**
- ・ いまの子どもたちの目線で考えることの大切さを感じた **地域**
- ・ 学生がどのように人間関係が希薄になっていくのかを聞いた **大学生**

第5回勉強会 楽しくなければ学校じゃない！ ～学校の現状と課題

- 日程：2024年11月6日
- 会場：SCC 千駄ヶ谷コミュニティセンター
- 参加者数：30名
- ゲスト：渋谷区立原宿外苑中学校副校長奥井伸氏



- ・ 先生や社会に対して希望を持ちつづけてはとおっしゃったのがあきらめがちな教育分野で光をみた **スタッフ**
- ・ 「やっちゃんえ！」原外中での取り組みが楽しくなっちゃう **地域**
- ・ 子どもの人権からみた、学校運営の必要性についても感じた **大学生**

第7回勉強会 若者のことを若者に聞く ～大学生に聞いてみよう

- 日程：2025年3月4日
- 会場：SCC 千駄ヶ谷コミュニティセンター
- 参加者数：27名
- ゲスト：日本大学文理学部教授梶野光信氏



- ・ 今までの価値観や固定観念を変えさせられました **子ども支援**
- ・ “聴く”ことの大切さをあらためて感じました **学校関係**
- ・ 大学生たちの実体験を聞いたことがよかったグループディスカッションが充実していた **地域**



こども食堂は地域の居場所

みんなのサポらぶ/みんなの世界テーブル 奈良直美

設立当初の状況

私たちの運営する「みんなの世界テーブル」は、2018年に設立されました。小学生を中心に、子どもたちが料理をし、一緒に食事を楽しみ、身近な素材を使って自由に遊ぶ——そんな食堂と居場所を組み合わせた活動です。

この活動を始めたきっかけは、地域には同世代のコミュニティやスポーツチームはあるものの、多世代が集まれる場が少ないと感じたからです。

見えてきた課題

当初は、子育て世代や小学生低学年、地域の高齢者を対象に、多世代交流を促進していました。しかし、小学3～4年生頃から受験勉強が始まると、参加する子どもが減り、中学、高校、大学と進むにつれて、その後の様子が見えにくくなりました。

小学校低学年までは地域コミュニティとかかわる機会がありますが、学年が上がるにつれて、勉強や学校生活に時間を取られ、次第に地域から離れていきます。順調にしている間は問題ありませんが、例えば「不登校」などの課題が生じた際、地域に受け入れられる場所があるのか——この点が「サポらぶ」勉強会を通じて見えてきた課題でした。

様々な取り組み

その1：「自分の時間を自分で作る」

学校以外に「楽しい居場所」があることを、小学校中学年頃から意識づけることが大切だと考え、昨年度から小学3年生以上を対象とした活動へとシフトしました。学校や塾では「教わる」ことが中心ですが、「みんなの世界テーブル」では、自分の好きなことを自由に楽しむ時間を提供しています。料理の時間には、「自分の味覚とイメージで自由に調理する」ことを大切に、多少の失敗を気にせず創作を楽しめるようにしています。

遊びの時間も、廃材を使った工作やゲームなど、子どもたちが思い思いに過ごせるようにしています。必要な場面ではボランティアが手助けしつつも、自主性を尊重することで、高学年になっても積極的に参加する子どもが増えてきました。

その2：「自分もボランティアスタッフ」

頻繁に参加するようになると、異なる学年や学校の子とも同士で交流し、相談したり、協力してイベントを企画したりするようになりました。また、大学生のボランティアとかかわることで、自然と「自分もボランティアとしてかかわりたい」と思う子どもが増えていきます。

現在は、「みんなの世界テーブル」を卒業した中学生や高校生もボランティアとして定期的に参加してくれるようになり、活動の継続性が生まれています。

その3：大学生サロン「世界テーブル会!!」

もともとは、「みんなの世界テーブル」のボランティアとしてかかわった大学生たちと交流を続ける場として始まりました。しかし今では、活動休止中の学生や新たに紹介された学生なども参加し、毎回10人前後が集まる場へと成長しました。

3カ月に1回のペースで開催され、食事をしながら、大学生活やアルバイトの話、社会問題について自由に意見を交わしています。普段顔を合わせる事のない人とも、ここでつながれるのが魅力のようです。

また、就職活動を終えた先輩が1年ぶりに参加し、自身の変化を若い学生たちとシェアする場面もありました。大学やバイト先とは異なる、大学生のための「サロン」としての役割が確立しつつあります。

「みんなの世界テーブル」の卒業生が、中学・高校を経て、この大学生サロン「世界テーブル会!!」に戻ってきてくれることを、私たちも楽しみにしています。

ユニバーサルな居場所

今後の課題は、「ユニバーサル・アプローチ」としての居場所づくりです。「サポらぶ」でも、このテーマについて1年間学びを深めています。

家庭や学校だけでは、すべての子どもにとって十分な居場所にはなりません。地域に「誰でも受け入れられる場所」があることが重要です。必要な時は寄り添い、時には遠くから見守る——そんな場を目指しています。

社会が大きく変化していく今、この「ユニバーサルな居場所」の必要性はますます高まっていると感じています。これから「サポらぶ」を通じて、理解を深め、よりよい居場所づくりに取り組んでいきます。



公立中学校での校内居場所の広がり

みんなのサポらぶ/民生児童委員/原外カフェサロン運営委員会 小林舞子

2023年5月1日から始まった『原外カフェ』も2年目となり、生徒たちにも「ホッと出来る放課後の居場所」として定着してきました。相変わらずスタッフは、毎回バタバタですが、予期せぬハプニングにもスムーズに対応をしていて成長を感じます。

カフェ活動の広がり

「原外カフェ」は、原宿外苑中学校校長から「道路沿いの通路でカフェを」という想いと、「子どもたちの放課後の居場所づくり」をしたいという想いが重なり、民生委員が中心となってスタートしました。参加を希望する生徒は事前予約をし、13時から16時までの時間を、飲食しながら、自由に過ごします。友だちと過ごしたり、宿題や塾の課題など勉強したりする生徒や、ひとりで読書やぼんやりと過ごす生徒もいます。毎月100人を超えるにぎわいで、普段は学校にこられない、教室では過ごせない生徒も来てくれています。

2024年秋、原宿外苑中学校で行う教員向けカンファレンスで、地域連携の事例として、カフェ体験をしてもらいました。その際、鉢山中学校校長から「うちの学校でも校内カフェがあったら良いな。どうしたら良いの?」と相談を受け、地区の民生主任児童委員を紹介し、2025年5月に2カ所目となる校内カフェ「はちかふえ」がオープンしました。この学校には、1組という特別支援クラスがあり、毎月楽しみに、お手伝いしてくれる生徒もいます。小学生の時に会った生徒も利用してくれていることを知り、嬉しく思いました。

校内放課後居場所活動の始まり

この活動のきっかけは2020年2月、政府が全国の小中高校に対して要請した一斉臨時休校でした。夏休みなどの長期休暇後に、不登校や自死の傾向が高まることから、児童・生徒支援の必要性を感じ、ピアサポートネットしぶやがかかわりのある代々木中学校に相談したそうです。学習の遅れ、教員の多忙さなどから校長の快諾を得て、校内でおこなう「ピアサポート学習」が始まりました。

その後広尾中学校校長から朝と放課後に補習を行う教員の負担軽減の相談があり、近隣の國學院大學や青山学院大学の学生ボランティア

の協力を得て、2021年、2校目となる校内放課後居場所活動「アフタースクール」がスタートしました。

生徒から敬遠される学習中心の居場所

どちらも参加する生徒は公募ですが、先生から参加を促された生徒が大半でした。気軽に友だちと一緒に参加できる場所を目指して、学生ボランティアが活動の柱でした。コロナ禍にあっても活動を続ける場所は少なく、様々な学部から参加者がありました。コロナが落ち着くなかで、学生を取り巻く環境が変化し、生徒も部活動、塾や習い事など忙しい日々が戻ってきました。生徒から「今日は〇〇さん、来ないの?」と。必要な時に学生はいない、少なくなりました。また教員から声掛けされた学習遅れや学級になじめない子が集う場所のイメージが固定化し、来訪を避ける生徒が増えました。

校内放課後居場所活動の展望

現在、どこの学校でも登校することが難しい子や、特別な支援が必要な子も増えています。普通に通えている子も思春期の心の不安を持ち、コロナ前後では人とのコミュニケーションの取り方がわからない子もいます。地域の大人として、生徒たちに寄り添い繋がれる時間はなかなかありません。しかし、校内カフェでは、生徒も、地域の大人も誰もが参加できる繋がりの場になっています。繋がりのなかで、原外カフェでは、セラピー犬との触れあいやプラモ（模型）づくりや文芸企画など他団体とのコラボ企画や、PTAや企業、大学・高校生、生徒や卒業生のボランティア受け入れなどで、多くの方々から協力を頂き、生徒のワクワクを生み出しました。

また『外国にルーツをもつ子ども』が全国的に増えています。渋谷区の公立中学校には日本語学級はありませんが、前述した校内放課後居場所活動に、外国籍の生徒が参加しはじめています。会話はできるけれど教科書の読み書きは難しく、日本史となると難易度が高くなり大変だそうです。新たなニーズの受け皿が期待されます。

いろいろな人と繋がり、話を聞き、子どもたちや保護者とどうかかわれるのか考えさせられました。ある生徒から「家では静か過ぎて、勉強が捗らないけど”原外カフェ”だと騒がしいけど勉強ができるんです。お菓子もジュースもあるし最高!!今度は、生徒スタッフとしてお手伝いしたい」と言われ、放課後の居場所は形や内容は違って必要で大事だと改めて思います。



自由な遊びは成長の根っこ ～せせらぎファンインの居場所づくり

みんなのサポらぶ/せせらぎファンイン冒険遊び場 小水知映子

願いを叶える居場所を求めて

2000年、学校が週5日制に変わり、土日に地域に安心安全な居場所が必要ではないかと考えたことから、「せせらぎファンイン」も居場所づくりの仲間になりました。

活動の仲間たちは、自分たちの子育てを通してどんな願いをもって、始めたのだろうか振り返ってみると、「この地域で、のびのびと育ててほしい」そのためには、どんなことをすればいいのだろう。居場所づくりをしながら考えていました。

公園はたくさんありますが、禁止の看板や、塀やフェンスやコーンで閉ざされた不自由な場所しかないことに気がつきました。それに決まりきった遊具。それすらも安全性を優先して使用禁止のまま放置されていたりすると、子育て環境的には残念な結果でした。禁止の看板がない、広くて、自然がいっぱいな、自由に遊べる公園？ 広場？ 空間が欲しい！ 土や草を踏みしめて、水を撒き散らしながら、笑顔で遊ぶことのできる場所をつくりたいと、目標がはっきりしてきました。

外遊びと自由でいられること

私たちの居場所づくりは冒険遊び場だと決まりました。

いつも通るたびにここが使えたらなあとか、遊び心をくすぐられるような所に直談判をしに行きました。願えば叶う。子どもたちのために場所が確保されました。

来たい時に来て、帰る時も自由。プログラムはなく、やりたければ自分で何かを見つけ、やりたくなければおしゃべりしたり、ぼーっとしたりできる所。

行けば誰かいて、何かすることを強いられず、評価もされない所。居心地がいいから居場所になっていくのかなと思います。

主体は自分自身、自分を学ぶ

ここでは、何より自分自身が主体です。子どもは遊んで育つと

昔から言われてきました。それは遊びの中にはたくさんの要素が含まれているからだと思います。

子どもは年齢と共に成長します。その子なりにその年齢なりに、トライアンドエラーを繰り返し、自分の力を知っていきま。得意不得意もそうですが、体をつくるのは何かをするために自分の体のどこを使うかを自分自身か知るといことです。飛んだり、跳ねたり、走ったり、投げたり、打ったり、しゃがんだり、物を運んだり、たくさんの動きを知らず知らずに体得しているのが、遊びの現場です。

好奇心が広がりを育む

そして、心も知らず知らずのうちに大きくなったり、深くなったりしています。これって、子どものウェルビーイングではないかと思ひます。また、工夫や努力という言葉は、居場所や冒険遊び場には不向きな言葉のように思われますが、遊び場の子どもたちはもっと面白くしたい、もっとうまくなりたいたいいつも頭の中でぐるぐる考えているのかなと思ひます。分からなかったり、手伝って欲しかったりする時などを通して、大人や他の人とのかわり方も、一方的ではなくなり、会話になってきます。

「遊び」がつながる力

そして大人も共通の体験をしていくと共有することが多くなり、感情が動き、子どもも大人もカチカチな日々が、ゆるんでいくような場所でもあります。関係に厚みが出てきます。

きっかけとしての遊びが 遊びのきっかけになる

ひとも、地域も、遊びを通してつながっていくといいなと思ひます。



学校と街・企業・行政が共創した インクルーシブ運動会 原リンピック

みんなのサポらぶ/ピアサポートネットしぶや 事務局

生徒が中心のイベント

6月8日（土）、原宿外苑中学校（以下原外中）で、「共生」をテーマにした体験型イベント「原リンピック」が開催されました。原リンピック実行委員長で生徒会長の目黒さんは、「生徒会本部(以下生徒会)が中心となってゼロから立ち上げた前代未聞のイベントです。さまざまな体験を通して共生社会の実現に向けて何をすべきかを考えるきっかけになればと企画しました」とPTA広報誌で述べています。当日は、夏の日差しが降り注ぐなか、生徒、保護者や地域の方々、一般の来場者を含め来場者数は約1000名を数えました。「原リンピック」誕生までの軌跡を紹介します。

東京大会からパリ大会を経て、2025デフリンピック東京大会へ

渋谷区では部署を新設し、東京大会に向けて、イベントの開催、学校での体験学習、スポーツボランティア募集などの取り組みを行ってきました。東京大会はコロナの影響を受け延期、1年後に無観客での開催となり、応援などの機会を失いました。しかし2016年から「ちがいをちからに変える街」を掲げる渋谷区では、ダイバーシティ&インクルージョンを意識した取り組みを広げ続けています。原外中でも、様々な取り組みが行われてきました。デフリンピック2025の開催地が東京に決まり、開会式は東京体育館となり、同じ地区にある同校では、新たな教育の機会にしたいという想いがありました。

応援キックオフ・イベントの開催

2020東京大会の開催を市民レベルから盛り上げるために結成されたパラスポーツを応援する草の根運動の会・渋谷にとって、2021年は消化不良の大会になりました。2024パリ大会と2025年のデフリンピックを盛り上げるべく、区内会場となる千駄ヶ谷・神宮前地区の原外中、原外カフェサロン運営委員会、みんなの世界テーブルを加え、新たに原パラ実行委員会を立ち上げ、2023年11月に、パリ大会へ向けた応援イベントを日本青年館で開催し、競技団体、地元の自治会や商店街、任意団体、企業などに呼びかけ、合わせて2025年に向けて、原外中で開催予定の地域協創イベントの計画を伝えました。

この応援イベントを契機に、原外中では2023年1月から、2025東京大会に向けて、生徒会に原パラ実行委員会のメンバーが加わり、新に実行委員会を立ち上げました。そして、予めから計画していた人権教育の時間を「共生」をテーマにした応援キックオフ・イベントに再構成し、生徒会が運営を行い、6月に予定している「地域協創イベント（のちの原リンピック）」のプレ・イベントと位置づけて開催しました。

生徒を真ん中に

実行委員会では、6月に向けて話し合いを重ねてきました。大人メンバーと役割を分担し、大人がどこまでやれば生徒に任ずることができるのかを考え、運営資金や専門的なことや発想（工夫や知恵など）などは対応し、生徒会の意見を最大限に生かしたイベントの実現に向けて取り組み、生徒会の決定を大事にしてきました。例えば、競技だけではなく、誰もが参加できるイベントにしたい → 給食のない日で午前中まで → 午後までイベントを開催するにはどうするか → 昼食を提供してくれるのは → キッチンカー → キッチンカーなどを呼ぶ費用をどうするか、というふうなことを議論します。具体的な項目にまで落とし込めれば、どんなキッチンカーを呼びたいのか、先方に確認して無理なものがわかります。その際、また生徒会に戻し、意見を聞き、納得して進めます。打ち合わせを繰り返す中で、生徒が話しやすい環境が整い、より積極的に、そしてそれぞれの個性を発揮し、また大人には想像もできないアイデアを出してくれたりします。

校長先生から「（頭が）固いので、ほぐすことに取り組んでいる」と。「やっちゃんえ、原宿」というのもその1つで、「とにかく行動してみて、うまくいかなかったらどうするかを考える」「変化の激しい時代には対応できない。いろいろな人と出会うのも大切」などと聞きました。パラスポーツ体験を軸に、様々なパラ競技団体や関連企業などが参加した「原リンピック」。全生徒が競技等に参加し、ボランティアとして運営に携わった生徒もいました。生徒会に限らず、目を輝かせ、楽しむ姿が目じりが下がります。

こんな形で勉強する機会は、生徒だけではなく、大人にこそ大切です。生徒が胸を張って自分たちが作ったといえる、そんな場が、今、必要です。

とりこぼしのない支援のかたち ユニバーサル・アプローチ

みんなのサポらぶ/みんなの世界テーブル 毛利マスキ

いま、求められている「居場所」とは？
ユースワークのありようを考え続けた1年

みんなのサポらぶ（以下サポらぶ）は、2023（令和5）年9月にはじめてのミーティングをおこなって以来、令和6（2024）年度までに7回の勉強会を開くなど、活動を続けています。協働協創〈なにを 誰のために だれと どのように 共に学び、考え、つくっていくのか〉を念頭に、なかでも「誰のために＝とりこぼさない 孤立をつくらない社会のために」できることはなにかについて、議論を重ねています。

こうしたなか、私たちの理念のなかに「ユニバーサル」ということがはじめて出てきたのは、2024年2月7日開催の第2回勉強会「高校生と一っしょに居場所を考える～ありのままにいられるってどういうこと？」の打ち合わせミーティングの席でした。

第2回勉強会は、高校生に登壇してもらい、大学生をファシリテーターに、居場所について若者からリアルな声を聞こうというものでしたが、事前ミーティングで相川氏（ピアサポートネットしぶや理事長）が「一番言いたいこと」を語られました。

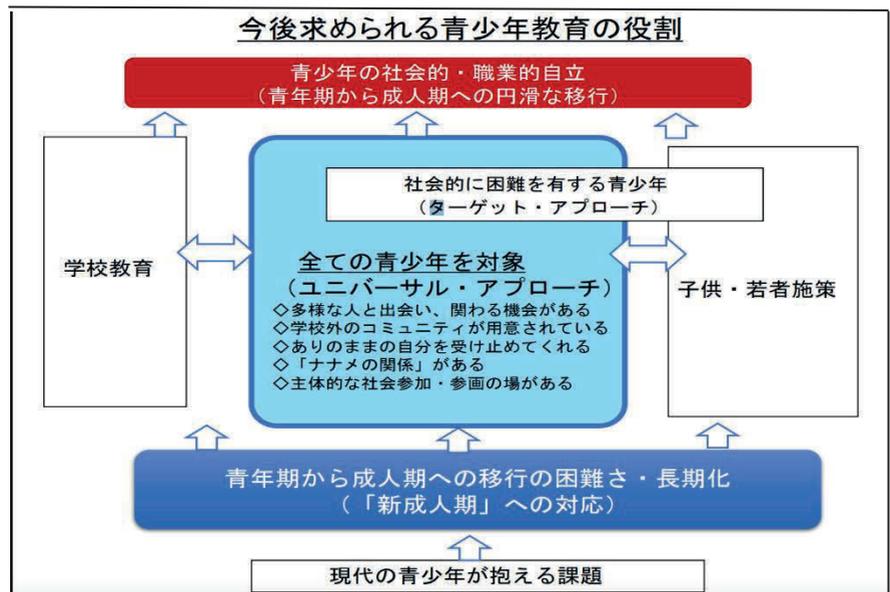


第7回勉強会にて。梶野教授との対話から学生のリアルが浮かび上がった。

「若い人は、若いゆえに適応しようとする力がある。人の話を聞いて、嫌でも合わせようとする。この適応力は前向きに考えれば、この力は社会で必要な力であり、言い換えれば《共感力》にすぐれているといえる。しかしそれゆえに、彼らは他人に気をつかい、他人と比較し、自分をせめ、同調圧力や立ち位置の確認に苦しんでいる。いまの行政の支援の形はターゲット・アプローチ（ひきこもり、不登校など社会的に困難を有する青少年に個別に着目）が主流だが、ターゲットのまわりにはこうした《共感力》にすぐれたユニバーサルな人たちがいる。この両者を総合的に包括してはじめて《居場所》となり、《ありのままにいられる》ことになるのではないか」（資料：議事メモ2024年1月23日）

さらに2月の打ち合わせの席では、サポらぶの目標のひとつである「居場所づくり」について、その理念を「ユニバーサル・アプローチ」に根ざしたものとしたいと述べられました。（資料：議事メモ2024年2月16日）

ユニバーサル・アプローチとは、いまの若者は、「青年期から成人期への移行が大変困難な状況にある」ことを前提にした支援のありようです。現代は、昭和のような「人生で歩むべき道筋」の価値観はなく、AIが社会に浸透し「今後なくなる職業」について語られるなど、予測不能な社会です。具体的な社会的困難の有無にかかわらず、こうした未来が見通せない時代を生きる若者すべてを対象に、いかに社会参加の意欲を高めていくかが求められています。令和6（2024）年度は、こうした若者に寄り添い、支える支援とはどのようなものなのか、ユニバーサル・アプローチを「サポらぶ」はどのように考えるのか。いかに居場所をつくっていくのかを、考えることがテーマとなりました。



第11期東京都生涯学習審議会概要より

https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/documents/d/kyoiku/gaiyou_46



第6回勉強会では東京都教育庁で31年間主事を務め、現在は日本大学文理学部教授の梶野光信氏を迎え、「ユニバーサル・アプローチって何ですか？ ～近所のおじさん、おばさんの役割を考える」を開催。学校教育や子ども・若者支援施策の「間」を埋めるもの、とりこぼしのない支援＝ユニバーサル・アプローチについて、大学生も交えて対話をおこないました。

そして再度、梶野氏をゲストに迎えた第7回勉強会では「大学生に聞いてみよう 若者のことを若者に聞く」と題して、大学生と梶野氏との対話に加え、ユニバーサル・アプローチについてさらに学びを深めました。このなかで、ユニバーサル・アプローチは現代を生きる子ども・若者すべてに必要なことを文京区青少年プラザb-labやユースワーク発祥の地とされるスコットランドのユースワークの活動報告を通じて確認。梶野氏は「全力で、若者のやりたいことをサポートする。こうした方がいいとアドバイスするのではなく、若者自身が《やりたいこと》をいかに実現するか、に寄り添いながらサポートしていくのがユースワーカーなのではないか」と述べられました。

約1年前から取り組みはじめたサポらぶのユニバーサル・アプローチについての学び。梶野氏のお力も借りて、少し形が見えてきたような？ 若者が主体であることを肝に銘じて、若者自身がコミュニティの一員として役割を発揮できるような力を養うことをサポートするのがおじさん、おばさんの役割なのかな？ でもおばさんは、どうしても色々と言や手を出したくなっちゃうから、なかなか難しい……。

約1年前の第2回勉強会を振り返るミーティング（2024年3月27日）の席で、サポらぶメンバーが言った「もや～としているのがユニバーサル。もや～としているから、さまざまな人が入れる。居場所はなくはないが、それって何？ といわれると得体がしれない」ということばも未だにこころに残ります。

相川氏がよく勉強会の最後に、「もやもやを持ち帰ってください」と語りますが、考え続けること、行動することが答えに近づく道と信じて、とりあえず今年も、「もやもやしながら」こどもテーブルや地域支援の活動を続けます！

2. 不登校・ひきこもりの 早期発見と アウトリーチ

不登校・ひきこもりの状態になってから、5年以上の時間が過ぎてから相談がきます。その間、子どもをひとりにしないために、何をすべきか。

4つの事例からひきこもり・不登校支援に欠かせない早期発見とアウトリーチについて考えました





事例 1

長いひきこもり、それは不登校からはじまった

ピアサポーター／介護士 辻本敏也

長い年月を経て

不登校の増加が続いています。特に小学生の数が増え、低年齢化が進みました。小学3年生で不登校になり、現在20代になった若者がいます。親御さんが相談に来たのが、7年前。家庭教師やメンタルフレンドとかかわる機会があり、そのことを思い出し、ピアサポーターに望みを託しました。しかし、体調が悪化したことも影響し、連絡は途切れてしまいます。保健師との来所や母親が途中まで同行し、来訪に結びつきました。

ピアサポーターと一歩踏み出す

事前相談で趣味や興味、関心事などを確認し、希望に沿うピアサポーターが選ばれ、対面で職員も交え顔を合わせます。顔合わせで、直接希望を聞くと、「外へ出たい、社会とつながりたい」との思いとは裏腹に、約束の日に体調が優れず、支援者と会えないことが続いてしまう。そして、そのまま疎遠になってしまうことを繰り返してきて、今回も定期的に来所したいのだが、毎回、約束通りに来られるのか不安と話してくれました。

どんなやり方なら希望を叶えられるのか、また、不安を取り除けるのかを一緒に考えました。まず、月2回程度の活動とし、無理のない曜日・時間帯で会う。次に、約束の日の朝に連絡を取り合い、体調や天候を確認し、一緒に何をするかを決定します。本人もこの提案に納得して、試行することになりました。

活動を続けるなかで見えてきたこと

活動を始めてみると、理想と現実とのギャップが生じます。

何が起こっても、気持ちを大切につなぎ止めていくように心掛けて、かかわってきました。当初は、朝に電話をくれる約束でしたが、実際には毎回、こちらから電話をしています。

朝が苦手ということがわかり、起きることができていない場合は、メールで状況を確認します。メールに気づき、連絡をくれる場合、約束の時間内か外かで、やることを相談して決めます。気づかなくとも、その日に連絡をくれ、体調を心配していたことを伝えます。こうしたやりとりのなかで、できなかったことやうまくいかなかったことを気にして、丁寧に謝ってくれます。

2. 不登校・ひきこもりの早期発見とアウトリーチ

私は、感情的にならず、事実を伝えます。例えば「昼夜逆転であれば、朝起きられないのは当然」、「遅れても連絡をくれているので気にする必要はない」と話し、加えて「連絡をくれてありがとう」と感謝を伝え、次回の予定を確認します。

事務所では他者ともかかわる体験を、外出同行では生活リズムの改善に取り組みました。活動を続け1年が経つ頃、本人から何かの活動に参加してみたいと申し出がありました。詳細を聞き、スモールステップからということに同意しました。団体と関係する地域の夏祭りで、ボランティアをすることを提案すると、イベントの裏方の経験があり、参加を決めました。

夏祭り当日は酷暑でしたが、テントの中での活動をやり遂げました。さすがに辛く、適切に判断してくれる人を必要としていたことを打ち明け、初めて怒りをぶつけてくれました。私は「辛すぎる思いをさせて申し訳なかった」と謝り、心折れずにやり抜いたことを心から労い、冷えた飲み物を手渡しました。彼との距離がさらに縮まったように感じました。

活動終了の申し出

活動開始から一年半が過ぎる頃、活動を止めたいとの相談がありました。詳細を聞くと母親の意向とのことで、本人の生活が充実したからではありませんでした。その後、直接母親と話してみると止めるどころか「今後ともよろしく願います」と返ってきました。不思議な感じを持ちながら、本人に伝えると、少し驚いた様子で、改めて母親と話してみるとのことでした。その後、母親は子どもの一人暮らしを望んでいること、心配はしているものの、終わりのない子育てへの不満を抱えていると感じ取ったとのことでした。今後は、団体に自分と母親の間に入ってもらい、話し合いに同席してほしいとのことでした。

「自分の気持ちを伝えること」は、積み重ねを通じて身につくことなのかもしれません。その機会を失わないように、家族以外の第三者とのかかわりを、より早い時期に持ち、継続することの大切さを感じています。母子の新たな関係性がスタートラインにつきました。



事例2 自律に向き合うアウトリーチ

ピアサポーター 鈴木昌平

子ども・若者をひとりにせず積極的にかかわることで
その人が本来持つ力を引き出していく

そもそも私がピアサポートにかかわることになったのは、自分自身の子ども・若者時代の経験がきっかけでした。漠然と生きづらさ・世の中への馴染めなさを感じていた私は、中学生のときに本格的な不登校に。それから学校に通ったり、大学に進学したりといった行動を起こすものの、自分のなかの根っこにある生きづらさは大きく変わらないままでした。

成人し、まだ社会のなかで居場所を見つけられずにいた私は、ある日インターネットで見つけたピアサポートネットしぶやへ連絡し、支援を受けることとなります。そこでピアサポーターという存在に初めて触れた私は徐々に社会との接点を見つけていき、さまざまな人と出会い、職を見つけ、と紆余曲折を経て社会の中で生きてきました。

そんな経験を得て、いつしか自分が抱えていたような葛藤を持つ若者たちに寄り添いたいと思うように。ピアサポーターに志願し、依頼を受けた若者たちとかかわる活動を続けています。

2023年夏ごろ、居場所利用していた若者と会いました。非常に礼儀正しく、挨拶が丁寧だったことを今でも鮮明に記憶しています。それから好きな歌手のライブへの同行が始まり、以後も不定期でイベント同行をしています。集合してからイベントまでの待ち時間にはゲームなど趣味の話をするのが多く、お互いに年齢が近いこともあって話がよく盛り上がります。

ただ、その中でも仕事について語り始めたときは常に真剣モードです。特に、仕事で感じる“人間関係の不安”についてよく話していて、時折本当に辛そうにしていることもあります。私からできることは基本的には共感と、偶の励まし程度しかないのです。自分なりに「うんうん」と聞いています。

2. 不登校・ひきこもりの早期発見とアウトリーチ

いつも聞いているなかで感じることは、対人関係に関する緊張感です。実は私はどんな経緯があり、またピアサポートネットしぶやとつながったのかあまり知りません。元々そうした情報を知る機会がなかったし、本人も、過去について話すことはあまりありません。

それでもピアサポーターとしてかかわっていると、そうした困難に対して、課題として捉え、懸命に立ち向かおうとしている様子がわかります。真面目な人柄もあり、つい応援してしまいたくなってしまいます。

そして、このように同行を積み重ねていく中で気付いたことがあります。彼がピアサポートの場で成し遂げようとしていること。実は、それこそが「自律」なのではないでしょうか。

【自分の行きたい場所やイベントへは1人で行くことが難しいケースも多いので、ピアサポーターに同行してもらって実現する】【ストレスの多い職場のことにに関して、ピアサポーターに話をすることで不安を和らげる】こうしたことを、明確な狙いがあるにしろないにしろ、自分の意志で行えていることがまさに「自律」への一歩と言えるのではないのでしょうか。

現在、新しい仕事に転職して、日々精力的に頑張られているようです。自身の希望である【より時間の長い仕事・お金を稼げる仕事・人間関係の良い仕事】にまた一歩近づいた状況で、先日お会いしたときには以前よりも顔色良く、また遅しくなられたように感じました。

こうした変化も、やはり若者の周囲にいる人たちのかわりがあったことなのでしょう。また今回のかかわりを通じて、私自身も多くのことを学ぶことができました。子ども・若者をひとりにせず積極的にかかわることで、その人が本来持つ「自律」の力を引き出していく。これからもそんな豊かなかわりを作っていけたらと思います。



事例3

親の会で見つけた自然体の自分

ピアサポートネットしゅや親の会 小野 美智子

「ありのままの自分でいい」ということを
親の会のなかでやり直しているのかもしれない

子どもが小学校で不登校になり、紆余曲折を経てピアサポートネットしゅやの親の会につながりました。支え、支えられて今の“私”があります。

「誰か私を助けて！」当初、このように感じていました。

子どものことでスクールカウンセラーや行政、病院などに相談したり本を読んで勉強したりしても全く上手くいきません。元々価値観の合わなかった夫や義理の両親との関係は更に悪化して家庭内で争いが多くなり、私はいつも孤軍奮闘の状態でした。それを見ていた息子はいつも私のことを心配し、自分のせいだと自分を責めていたようです。当時の私は子どもをどうにかしなければという思いが強く、子どもの気持ちに気付いてあげる余裕がありませんでした。そんな時にピアサポートネットしゅやの親の会にご縁があり参加することになりました。子どもを孤立させないことが大切なのだと同じように、親も孤立させないこともとても大切なのだと思います。

同じような境遇の親（ほとんど母親です）たちが集まり、話を聞いてもらえる、痛みをわかってもらえることで本当に助けられました。それぞれの境遇の違いも超えて、その場で一緒に感じてもらえる体験を繰り返していくと、共感してもらえた喜びと、また聞いてもらいたいという仲間意識が芽生えてきます。正解は分からないし、子どもはまだ動かない。それでも私は私、ありのままの私でいい。何か新しいことを始めたいなあという気持ちになっていきました。

親の会に初めて参加するときは、みんな見えない仮面を付けていて、本来のその人のよさが隠れてしまっているような気がします。

2. 不登校・ひきこもりの早期発見とアウトリーチ

家庭内の話もどこか不自然で不調和で、第三者から見ると何かに囚われてしまっているように感じます。親も子どももみんないい人なのにその人の良さが発揮されていない。でも自分のことは自分では分かりません。そんな時、その場のメンバーの何気ないひと言が気付きになることも多々あります。子どものことばかり気にかけていたのが、多くの親はいつの間にか自分の内面に目がいくようになります。本当の自分が望む生き方をしていくことや楽しむことを少しずつ許し始め、子どものせいで何かが出来ないという状態から抜けていきます。何かが吹っ切れ、囚われていたものからどんどん自由になっていく行動力にびっくりすることもありました。自分のやりたい仕事にチャレンジしたり、子どもを家に残して夫婦で毎週ラグビー観戦をしたり、自然の中で里山の活動を楽しんだり……話し方や顔つきまでも変わってくるのが本当に面白いです。母親が元気になって生き生きしていくことは子どもも嬉しいのでしょう。自然に子どもも変わっていき、だんだんと家族関係もよくなる人が多い気がします。私たち親の世代は時代的にも自分の親にありのままを受け止めて共感してもらおう体験が少なかったような気がします。

本来の自分ではなく、親や社会から求められる価値観に合わせるように矯正されてきました。人によっては親に余裕がなく、辛い子ども時代だったのかもしれません。子どもの頃に家庭の中でやって欲しかった「ありのままの自分でいい」ということを大人になって親の会の中でやり直しているのかもしれない。親の会を通じて本来の自分に戻っていく。それはひと回りもふた回りも大きく成長した自然体の自分。そんな現象が私たちの親の会ではたくさん起きているような気がします。

古い価値観を手放して自然体で余裕のある大人がどんどん増えていくことで、この不自然で不寛容な社会がきっと変わっていく。本来、大人も子どもも誰もがそういう力を持っていて、自分の力を思い切り発揮したいと願っているのではないのでしょうか。子どもたちも自分の力を見つけて、のびのび自然体で育つ社会を残すことが大人の役目なのだと感じています。



事例4

公立中学校の校内居場所を支える

大学生ピアサポーター

～「先生」以外の大人と出会える場

ピアサポーター・青山学院大学3年 岩永実津穂

多忙な生徒

大学1年生の春から、広尾アフタースクール（以下：広尾AS）に、かかわっています。初めての活動の際に感じたことは、中学生の多忙な日常への驚きでした。生徒から話を聞いてみると、学校の勉強や行事、定期テスト、部活動といった学校生活の話題とともに、塾や資格試験の勉強、習い事などの話も挙がりました。その後も活動を継続していくにつれ、生徒は放課後もやるべきことが山積みで、好きなことに使える時間の少なさが窺えました。目の前のことへ一生懸命に取り組んでいる生徒に、尊敬の念を覚えるとともに、全力で頑張っていることで、彼らが、疲れてしまうのではないかという不安でした。自宅でも学校でも、やるべきことに追われている生徒は、常に頑張らなければならないプレッシャーにさらされているのではないのでしょうか。

Hiroo After Schoolの醍醐味

そのような現状を感じ、広尾ASを、生徒が、肩ひじを張らなくてもいいと思える居場所の一つにしたいと考え、活動を続けています。広尾ASでは、黙々と勉強や宿題をしている生徒もいますが、雑談をしている生徒もいます。私たち学生も、時にはマンツーマンで勉強を教えたり、生徒と一緒に遊んだりしています。生徒各々が、自由に過ごせる時間と空間を提供することが、広尾ASの存在意義の一つではないのでしょうか。普段の学校生活には学年やクラス、時間割といった枠があります。しかし、広尾ASでは、そうした枠がありません。毎回来る生徒もいれば、たまに来る生徒もおり、拘束感のない緩やかで自由な関係性が築かれています。学校生活の中においては、やるべきことや、しなければならないことが、決められていない、まとまった時間は、限られています。

学校の中でありながらも、そうした時間を過ごせる場があることで、遊びも、おしゃべりも、宿題もできる、どのような生徒も拒まない自由な雰囲気醸成されています。

2. 不登校・ひきこもりの早期発見とアウトリーチ

教室は違う異空間

その自由を担保している物として、斜めの繋がりがあるのではないのでしょうか。中学校にいる大人のほとんどは、生徒が「先生」と呼ぶ人々です。勉強を教えてくれ、指導をしてくれる先生方を、生徒は頼りにしていると思います。しかし、先生と生徒との関係は、上下関係という一面を備えています。広尾ASでは、この「先生」が不在です。参加してくれている生徒は、活動している学生のことを「先生」と呼んでいません。学生と生徒の関係性は、先生と生徒のような上下関係でもなく、同級生の横一線の関係でもない。学校の中でありながら、「先生」と呼ぶ必要がない年の近い関係は、生徒が話せる空間を作る一助になっています。思い返せば、私自身が中学時代に、先生や保護者以外の大人とかかわる機会はほとんどなく、大学生になってから、社会の広さに驚かされました。生徒が普段の生活でかかわる機会のない他世代とかかわる場にもなっているのはプラスだと思います。さらに、普段は教える側の学生が、生徒から教わる側になる立場の逆転もあり、その関係が固定化されていない点も、教室とは異なる空間になっています。生徒自身が、年上の学生に教える経験を通して、自信につながっているのではないのでしょうか。そうして得た自信が日頃の学校生活へも、好影響を与えることを期待しています。

居場所の大切さ

また、広尾ASは、校内で開催されているため、生徒がアクセスしやすく、放課後にふらりと立ち寄れる気軽さがあります。その場に足を運ぶハードルが低いことは、生徒が継続的に居場所を利用するために、不可欠な要素だと感じました。ただ居場所を開くだけでは不十分であり、その居場所を、いかに生徒にとって通いやすく、かつ心地よい場にしていくかが、居場所づくりをする上で重要と考えました。生徒にとって、広尾ASは、時には愚痴や弱音を言えるような安心感を持つ場であってほしい。学校や自宅以外にも居場所を持っているという安心感が、生徒の日常を下支えし、ひいては彼らの挑戦しようという意志の源泉になるのではないのでしょうか。

このように複数の居場所を、子どもたちが持てるよう、支援することの必要性は、年々増しているように思います。広尾ASに限らず、今後も、子どもたちが、できるだけ多くの居場所を持てるように、私たちができることを模索し続けていきたいと思っています。

3. 課題を探る



2024年度の活動を振り返る

みんなのサポらぶ/ピアサポートネットしぶや 相川良子

期待された効果

～近所のおじさん、おばさんの役割？

不登校や若者世代の自殺の増加など、子どもや若者の状況が深刻化する中、彼らの「今」を知り、居場所とは何か？ を考えることを継続した。テーマを「子ども・若者をひとりにしない・つながりが生まれる地域づくり」とし、子ども・若者・地域の大人を居場所づくりの主体として、捉えなおすことから始めた。

○幼少期からの生活体験～かかわりの根っこを育てる

みんなの世界テーブル、原外カフェサロン運営委員会、せせらぎファンイン冒険遊び場、ピアサポートネットしぶやの4団体では、それぞれの持ち味を生かした居場所づくりが進められ、幼少期からの生活体験の不足が叫ばれる中、年齢、国籍、食文化や遊びなど多様なかかわりの体験が生まれた。民生委員やPTA、町会、社会福祉協議会など新たなつながりと、他の学校への広がりがみられた。中でも、居場所は国籍の多様性もみられ、多文化共生の足掛かりになっている。

○子ども・若者を権利の主体として捉える

子ども・若者にかかわるにあたって、本年度第1回（第4回）の勉強会で、「子どもの人権」について考えた。特に、子ども・若者の意見を「聞く＝聴く」、代弁することの重みを知り実践に生かすことができつつある。

○学校を軸に、地域と行政・企業・NPOが「面」でつながる

中学校を拠点として、つながりを体感する地域共生インクルーシブ運動会では、パラスポーツを学校の生徒会を軸に地域ぐるみで体験するイベントを通して、学校と街づくり、行政、企業、NPO団体等多様な協働が生まれ、約千人の来場者を集めた。

○子ども・若者の生きづらさと居場所の在り方について考える

勉強会の中で、生きづらさを個別の課題にすることなく、今を

生きるすべての子ども・若者と関わり合う大人の問題として捉え、身近な社会の中に「育つ機能のある居場所」ターゲット・アプローチを包み込む、ユニバーサル・アプローチの必要性を確認した。子ども・若者を居場所づくりの主体として捉えたときに、「近所のおじさん、おばさんの役割」とその主体性についての議論の糸口が生まれた。

残された課題

～子ども・若者のインクルーシブな居場所をこの街に

この街に、インクルーシブな若者の居場所をつくることが基本的な課題である。そのためには、子ども・若者、この街に住む大人それぞれが、この課題を自分事として捉えるプロセスをつくることであろう。

○4団体ユニットプラスをつくり、それぞれが、子ども・若者の意見を取り入れ、街の大人のかかわりが実感できる場とし、学生、企業人等の民間ボランティア等の参加も呼び掛ける。

○中学校での校内カフェを複数校に広げる。そのためのコーディネート活動の課題を共有する。

○不登校・ひきこもり対応に当たっては「ひとりにしない」をベースに、教育、福祉、社会福祉協議会等との協働をさらに進める。

○中学生と共に、「地域共生社会」を目指すイベントを企画し、地域の団体や企業やNPO、各種団体等の横のつながりをつくる。

○活動を振り返り、情報の共有をする勉強会を更に続ける。

子ども・若者・近所のおじさん、おばさんが居場所づくりの主体となること、そのために、かかわりの中で「聞く＝聴く」ことを基本に据えたい。



おわりに

千駄ヶ谷・神宮前という渋谷の東部に生まれた小さな4団体のユニット「みんなのサポらぶ」は、勉強会という「情報共有プラットフォーム」を通して、中学校や不登校対応をしている教育センター、こども食堂などから社会福祉協議会や福祉部が進める重層的支援の一端を担うことができました。

地域共生社会を目指した中学生が企画運営する「原リンピック」では、町会や、青少年対策地区委員会やPTAなどのご協力をいただき、約1,000名の参加がありました。この間、ご意見、ご指導をいただいた中学校の先生方、広報やコンサルタントとして応援してくださった（株）宣伝会議や東洋学園大学広報部、原宿外苑中学校や生徒会、パラスポーツを応援する草の根運動の会・渋谷、東京都国際スポーツ事業部、渋谷区福祉部、教育委員会、学びとスポーツ部をはじめ社会福祉協議会、地区民生委員やPTA、青少年委員など、各セクションのご協力があったの事業でした。

みなさんに、心から感謝申し上げます。

編著者

特定非営利活動法人

ピアサポートネットしぶや

2009年より、ひきこもりの状態等で困難を有する子ども・若者支援に取り組んでいます

子ども・若者をひとりにしない

つながりが生まれる地域づくり

2025年3月31日 第1刷発行

編集・発行 特定非営利活動法人ピアサポートネットしぶや

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿 4-7-6 KTビル201

TEL：03-6459-3848 <https://peersupport.jp/>

助成 独立行政法人福祉医療機構

令和5年度（補正予算）社会福祉振興助成事業

印刷 株式会社あーす